



市立病院だより

ほほえみ



発行	越谷市立病院
発行人	院長 津村 秀憲
編集	院内情報誌編集委員会
連絡先	〒343-8577 越谷市東越谷10-47-1
電話	048-965-2221(代)
FAX	048-965-3019
発行日	平成23年11月(No.10)

内視鏡室等増築工事

について

事務部長 野口 晃利

現在、西側駐車場の一部を鉄柵で囲い建設が行われているのは、1階に内視鏡室、2階に外来化学療法室、3階に会議室を設置する工事です。

内視鏡室は開院以来の施設であり、当時は取り巻く状況が大きく変化し、近年の内視鏡による検査等の需要に応えるには狭隘で、患者さんにとっても快適とは言えない環境にあります。また、外来化学療法は、現在8階の休床病棟で施行していますが、8・1病棟を再開するため、専用の治療室を新たに整備する必要があります。さらに、研修会や実習生の控え室等として、旧看護学校の校舎は、越谷市として（仮称）初期救急患診療所や保健所を設置する計画があるため、近い将来病院としては使用できなくなります。

そこで、これらの機能を備えた施設を整備するため、平成24年3月の完成を目指して建設工事を進めているところです。鉄

骨造3階建て、建築延べ床面積は約1,000㎡です。既存棟とのアクセスは、1階が脳外科外来隣の処置室、2階は採血室の所が新たな通路になります。したがって、処置室は現看護相談室へ、採血室は現臨床検査科検査室へ移ることになります。それぞれの移転時期については工事の進捗に合わせ事前にお知らせいたしますので、ご協力よろしくお願ひします。

新しい内視鏡室は、検査室や回復室が増えるだけでなく、器具の洗浄や保管、患者さんや看護師等の動線などにも配慮いたしますので、より快適で安全に受診できるようにになります。外来化学療法室には20のベッドと診察室の他に専用の相談室を設けています。会議室は間仕切りにより人数に応じた使い方ができ、院内の会議だけでなく市民公開講座などを開催することもできます。

順調に工事が進めば、来年の春には新しい施設で診療できるようになり、さらに安全で良質な医療環境が提供できることとなります。工事期間中は騒音や振動等、何かとご迷惑をお掛けいたしますが、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。



ワクチンを取りまく

接種環境の変遷

小児科副科部長

I C D、感染症専門医

新妻 隆広

V P Dとは少し聞きなれない言葉かもしれませんが、Vaccine Preventable Disease、ワクチンで予防可能な疾患であり、その認識も広まりつつあります。海外では標準であり、日本で接種されなかったワクチンも、2008年12月にインフルエンザ菌B型ワクチン(Hibワクチン)を皮切りに、2010年2月に7価結合型肺炎球菌ワクチン(PCV7)も発売され、ようやく本邦でも髄膜炎などの重症感染症予防のため、対策がとられるようになりました。しかし、Hibワクチンはフランス製造品の輸入に頼っていたため、本数に限りが生じ、医療機関において月に接種できる数は少数に限定されていきました。さらに任意接種であるため、各医療機関によって異なりますが、自費で八千円〜一万円程度支払わなくてはなりませんでした。

ワクチン行政も変わりつつあり、2010年末より、西日本からHib・PCV7・子宮頸癌ワクチンの接種無料化の波が押し寄せ、埼玉県はそれに遅れること2011年4月に無料化しました。

各種ワクチンが販売され、接種の際に、効果もさることながら、特に日本という国は過剰に副反応を懸念します。後遺症を残す・死亡に至る重篤な副反応は、現実的に経験する数字ではないとしても、経験した

家族にとっては容認できることではありません。この世に副反応のない薬剤は存在せず、安全性の高い薬でも心配ないとは言いきれません。そのため予防接種したことにより障害を受けた方々には、相当の補償を国が負担するという体制を整えることこそ、ワクチン行政を安定化し、牽いては国民をV P Dから守ることにつながります。V P D自身はわざわざワクチン開発すべき、時には重篤な状態に陥ることを懸念すべき病気であることの認識は低い様に思われます。かつて百日咳は、乳児で罹患すれば重篤な呼吸不全のため、年間一万人以上死亡していた疾患とは、三種混合ワクチンが定期接種されている現状では想像もつかないことです。また麻疹も江戸時代には「命定め」の病であり、罹患すれば死亡率も低くなかったことが推測されます。日本がW H Oに「麻疹輸出国」と非難され、一歳を過ぎたら必ず麻疹ワクチンを接種しようとする接種率を向上し、麻疹・風疹混合ワクチン二回接種に変更した効果もあり、年間二十万人程度いた麻疹患者も、2010年には年間457人に減少しており、ワクチン接種効果は明白と思われれます。麻疹は空気感染する感染力の強力なウイルスであり、一旦発症すると、免疫のない患者では集団発生する可能性があります。V P Dを知り、治療薬の存在しない感染症に適切にワクチン接種で免疫を獲得することは、個人防衛はもとより、感染を散布させないことで社会の迷惑にならないよう努めることが大事であると強調いたします。

ワクチンについて知っておきたいこと

薬剤科 感染制御認定薬剤師

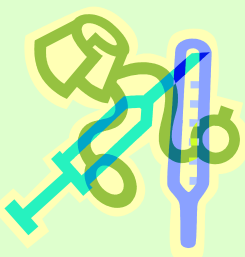
山下 佳子

ワクチンとは、感染症の原因となる細菌やウイルスの病原性を弱めたり、毒素を無毒化したものです。ワクチンを接種しておくことで抗体が体の中で作られ、本来に強い病原性をもつ細菌やウイルスが体の中に入ってきた時に発症や重症化の予防が可能になります。

ワクチンには、①不活化ワクチン(病原性を消失させたり毒素を無毒化させた製剤・日本脳炎・インフルエンザ・百日咳【略号P】・肺炎球菌・Hib)、②生ワクチン(病原性を弱めた製剤・ポリオ・はしか【M】・風疹【R】・おたふくかぜ・水痘・結核【BCG】)、③トキソイド(毒素だけを取り出して無毒化した製剤・ジフテリア【D】・破傷風【T】)の三種類があります。

市町村が主体となって無料で行う定期接種(BCG・三種混合【DPT】・ポリオ・二種混合【MR】・日本脳炎・追加二種混合【DT】)と、保護者の希望により有償(一部公費助成制度あり)で行う任意接種があります。

ワクチン接種はお子さんへの素敵なプレゼントになってくれることでしょう。



小児感染症の検査について

臨床検査科 五十里 博美

小さなお子さんを持つ親御さんにとって、感染症は常に心配の種であると思われれます。ワクチンも薬も増えましたが、まだ免疫力の未熟な乳幼児にとって巷のウイルスや細菌が大きな脅威であることには変わりはありません。

小児科の感染症でもっとも恐ろしいものは細菌性髄膜炎です。治療が遅れば命の危険があり、重い後遺症が残ることもあります。当院でも年間に数例の細菌性髄膜炎が見られます。私たち検査室のスタッフは髄液を検査して、細菌と戦っている白血球の数を調べ、病気の原因となる菌の種類を特定して医師が薬を選択する手助けをしています。たくさんの白血球が細菌を取り囲んで戦っている様子が検査の段階で見られます。免疫力が重症化を防ぐために大切であることが目に見えて理解できます。

米国ではHibワクチンが早くから普及しており、日本で多いヘモフィルス菌の髄膜炎はほとんどありません。重い髄膜炎にかかって苦しんでいるお子さんや家族、全力で治療に当たっている医師・看護師を見るたびに、一日でも早く日本でもワクチンが普及して髄膜炎患者がいなくなる日が来ることを願わずにはいられません。

「タオル帽子」を通しての

患者さんのほほえみにふれて

認定看護師 4・2病棟担当 安達なさ子

私は、緩和ケア認定看護師として活動をしています。「緩和ケアってなに？」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、患者さんとそのご家族の体や心の痛みを和らげるケアのことを示します。院内では、他職種と協同し、「安心」「その人らしさ」が維持できるよう、医療者と患者

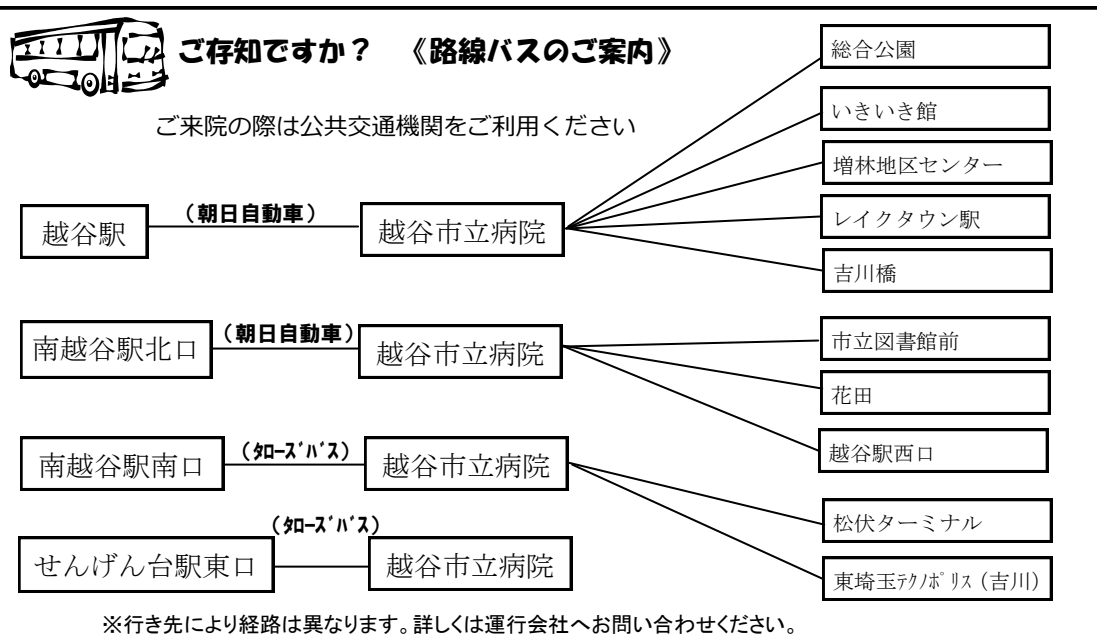
さんの橋渡し役に努めています。院内乳がん患者会「さくらんぼの会」や、「リンパ浮腫教室」では、患者さんから多くのことを教えていただき、日々の活動に活かしています。

ある日、タオルで作成された帽子を身につけ「お世話になります」と笑顔で入院されてきた患者さんをお見かけしました。この患者さんが身につけていた「タオル帽子」は、治療により脱毛した患者さんのために、ボランティアで関根さんが作成しています。

この「タオル帽子」は、以前メディアで、市民団体「岩手ホスピスの会」が制作活動に取り組み、全国の病院に寄贈されていることが紹介されました。関根さんは、この型紙を自ら取り寄せ作成し「当院の患者さんのために」と届けていただいています。

このタオル帽子作成のきっかけをお聞きしたところ、身内で脱毛を経験した姿をみて「同じように悩んでいる方の役に立ちたい」と思ったそうです。タオルの模様も季節に合うように工夫されています。患者さんからは「かわいい」「洗濯ができる」「治療で脱毛のことを聞いていたが、何から用意したら良いかわからなかった。帽子はうれしい」など感謝の声が聞かれ、一瞬でも表情が和らぐ姿を見ると私たち医療者もほっとします。

人と人を通して助けあうことで、心と心がつながっていることを感じさせてくれることを実感しています。今回この紙面を通してご紹介させていただきました。



編集後記

おかげさまで「ほほえみ」も第十号の発行となりました。これからもご愛読のほどよろしくお願いたします。

院内情報誌編纂委員長 石井 義之